

2019 パリ写真月間報告

2019 Paris photo report

市川 泰憲

Yasunori ICHIKAWA

Author JCII Camera Museum Steeringcommittie member

11月のパリは、写真機材中心のサロン・ド・ラ・フォト、作品主体のパリフォト、フォトフィーバーなどの写真イベントが集中して開催されます。昨年に引き続き今年もパリの写真イベントを見てきましたが、毎年大きく変わらないと思っていましたが、今年は日本とのかかわりにおいて、ガラッと変わりました。本レポートから、動いている写真の世界を少しでも読みとっていただければ幸いです。

■サロン・ド・ラ・フォト (11.7 ~ 10)

Salon de la Photo (www.lesalondelaphoto.com)

サロン・ド・ラ・フォトは写真機材と用品などのショーだ。毎年、パリの国際見本市展示会場のParc des Expositions Paris Porte de Versaillesで行われる。今年の注目点は、5月に予定されていたドイツのフォトキナが中止になったので、その流れから、この時期ヨーロッパ市場に初お目見えのカメラ機材も多く、さらに新製品が現地で突如として登場することも過去にはあったので、日本から期待をもって会場を訪れた。

会場となる建物は展示会場に入っすぐ左側にあり便利だ。会場全体を正門から裏門まで横切ると楽に15分はかかる広さであり、数年前には裏門の前のホテルを予約したこともあり、会場への入場や移動に閉口したことがある。

われわれが入場するのは開会初日であるが、10:00からの開場前に並ぶ人は日本ほど多くはなくピーク時で100人ぐらいだろうか。会場には、一般入場者、VIPともに手荷物検査があるが、このあたりはここ数年の傾向であるが、今年は少し緩和されているのではないかという印象をもった。この訪れた日は、朝から夕方まで、会場にいるのだが、日本のように学生風の若い人はあまり見なく、フランスでの写真愛好層は熟年の男女が多いが、休日はどのような入場者構成になるのかわからなく、フランスの写真ファンはここ数年を見渡してみても熟年層がメインのようだ。

そして私が、この場に訪れているのは、カメラ映像機器工業会(CIPA)のCP+のZOOMS JAPAN



サロン・ド・ラ・フォトが開かれたパリ国際見本市展示会場



展示は、入っすぐの2階建て建物で開かれる。左から2019 ZOOMS JAPAN 入選の高木良さんと、サトウヒトミさん

(cpplus.jp/zoomsjapan/)の入賞者、関係者と共に、入賞者の展示、トークショーに関連して訪問した。全体の展示並びに写真の傾向には変化がないような印象もあるが、継続しているなかに新しい動きがあるようなので、そのあたりを重点にレポートしていくことにしよう。



ZOOMS 2019 入賞者日仏4人の作品が飾られた展示ブース

ところでこのサロン・ド・ラ・フォトの公式ガイドブックだが毎年書いているように、展示会そのものはカメラや用品が主体だが、会場で販売される公式ガイドブックにはカメラや用品の記述は一切なく、すべて写真作品の紹介で埋まっているところがいかにもフランスらしいところだ。

今年はそのようななかで少し変わったことが起きた。何と表紙に ZOOMS JAPAN 2019 入賞者のサ



日仏 ZOOMS 関係者でトークショーが開会初日に開かれた。写真はステージ上で日本側入賞者サトウヒトミさんの受賞作『Layered NY』について解説をする日本カメラ編集長の佐々木秀人さん

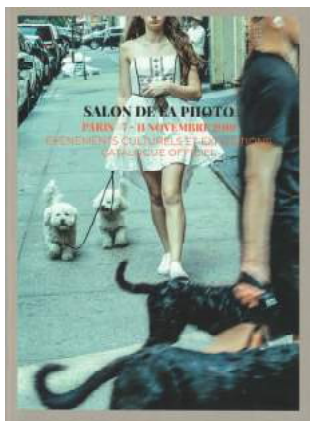
トウヒトミさんの作品が表紙を飾ったのだ。公式ガイドブックに ZOOMS JAPAN の入賞者作品が掲載されるようになったのは2016年からで、2019年で4回目となるが、その受賞作品が表紙を飾ったのは初めてのことである。

ZOOMS の入賞者は、日仏合わせて4人だが、会場には ZOOMS の写真展示会場があり4人の作品が展示される。

さらに2019年は、この公式ガイドブックの表3と、サロン・ド・ラ・フォトのパンフレット表紙には、やはり日本人でフランス在住の女性写真家ノナカレイコさんの双子の作品が採用されている。ノナカさんの作品はサロン・ド・ラ・フォト建物入り口の看板の写真としても使われており、会場出口手前にも一連の作品が飾られている。

■サロン・ド・ラ・フォトの公式ガイドブック

左下はサトウヒトミさんの作品が載った表紙、その右はノナカレイコさんの作品を紹介した表3。右上は本文中に4ページにわたって高木良さんの作品が紹介され、サトウさん、ノナカさんも同様に紹介されている。右下は、Ali Mahadai 氏の作品紹介ページ。このようにフランスの作家が約30人、作品とともに紹介されているが、カメラ・レンズの情報は一切ない。260×190mm判・96ページ。ISBN: 978-2-9546818-7-0、価格10ユーロ、本書と過去のバックナンバーはJCII ライブラリーで閲覧できる。





Canson。1557 年創業のフランスの製紙メーカー



Hahnemühle。1584 年創業のドイツの製紙メーカー



Innova。イギリスの製紙メーカー (www.innovaart.com)



Permajet。イギリスの写真用品企業の IJ 用紙 (www.permajet.com)



Lumiere Imaging。1907 年オートクロームを発売したフランスのルミエール社の流れをくみ、現在はイルフォードやベルボンの製品を扱っている



KIS PHOTO ME。フランスのセルフプリンターメーカー

● 1 階はフランスなどヨーロッパ企業が占める

会場は、2 階建てフロアの 1 階と 2 階に分かれていて、大きく分けると 1 階はフランスなどヨーロッパの企業、2 階は日本のカメラ、交換レンズメーカーというように見ることができるが、アルバムやフォトブックメーカーは全体に分散して出展している。

主なフランスの企業としては、IJ ペーパーではファインアートペーパーとしてキャンソンやハーネンミュレが良く知られているが、イノーバ、パーマジェット、イルフォードなど、いずれも代理店を通じて日本でも販売されている。



Tetenal。1847 年創業のドイツの写真薬品メーカー

KIS PHOTO ME 社は、かつてはミニラボ機器を製造販売していたが、現在は ID 認識、ランドリー、フォトキオスク機器を製造販売しているが、フラ



DNP フォトイメージング



エプソン



三菱電機



ニッシンデジタル、後ろにはEIZO が

ンス独自で機器を製造展開している企業としては注目される。ちなみに社名の KIS は Key Instant Service の略で、合鍵製造から始まっている。

このほか1階に陣取る日本企業ではDNP フォトイメージング、エプソン、三菱電機、EIZO などが目についたが、あくまでも私の知る範囲であり、まだまだありそうだ。



キャノンブース



左側のカウンターからバレリーナを試写できる



さりげなく置かれていた「EOS-1DX Mark III」と「EOS Ra」

2階にエスカレーターで上がるとまず目に入るのが正面の ZOOMS の写真展示コーナーと、右手のキャノンのブースだ。

●キャノン

キャノンブースでは、ステージの上でバレエを踊っていて、それを試写させるというようになっている。写真を見てお分かりのようにこの時期の一押しの機種は、ミラーレスの EOS RP と一眼レフの EOS 90D というわけで、それぞれのラインのなかで高級機よりも普及機を前面に打ち出している。

とはいっても、レンズコーナーには超望遠がずらっと並べられていて試写もできる。さらに、この時点では日本国内未発表のオリンピック用と目される「EOS-1DX Mark III」と天体撮影用の「EOS Ra」がさりげなく置いてあった。



ニコンブース



ニコンブース正面。主力はミラーレス。Z7 と Z50



ニコン Z50 の解説カウンター

●ニコン

昨年はこのタイミングはZ6であったが、この時期はZ50が前面に押し出されている。もちろん一眼レフがなくなったわけではないが、ミラーレスへの移行を積極的に進めているという感じだ。私自身、APS-C判のZ50はこの場で初めて手にしたが、ストロボ内蔵で小型化されているのには、好感をもった。Z7、Z6、Z50と展開されてきたニコンのミラーレスだが、次はどのような展開だろうか。

●ソニー

デジタルカメラフルサイズではαシリーズでは圧倒的な強さを誇るソニーだが、APS-C判のα



ソニーブース。αのフルサイズがメインキャッチ



ソニー。奥にはスマートフォンXPERIAのコーナーが見える



ソニーブース。プロによるトークショーは人気

6600、α 6100、フルサイズで最高画素数6,100万画素を誇るα 7R IV、10コマ/秒連写Lan端子による1Gbpsの転送が可能なα 9 II、コンパクトのサイバーショットRX100 VIIとさまざまだが、スマートフォンのエクスペリアシリーズまでコーナーを設けるなど、家電メーカーらしさも見せている。各コーナーの作りは、昨年とまったく同じだ。

●オリンパス

オリンパスでは10月にマイクロフォーサーズ方式のレンズ交換式ミラーレス一眼として「OM-D EM10 Mark3」、「PenE-PLD」を発表し、11月下旬発売として、まるでサロン・ド・ラ・フォトのタイ



オリンパスブース。2019 年でオリンパスは創業 100 周年である



パナソニックブース。フルサイズのリミックスとマイクロフォーサーズのリミックス



富士フイルムブース。デジタルカメラの X シリーズとインスタントカメラのインスタックスがメイン

ミングに合わせたようなタイミングの発表だった。いずれの機種も手ブレ補正機能の強化がなされ、高級機 OM-D EM10 Mark3 では防塵・防滴機能が加わっている。

●パナソニック

パナソニックは 9 月にフルサイズミラーレスで 2,420 万画素の DC-S1H をシネマクオリティの動画プロ用機材として発表している。もちろんマイクロフォーサーズのコーナーもあるが、ブース全体としてはキヤノンやニコン同様にレンズバーがあったり、プロコーナーがあったりとかなりプロ

ユーザーを意識したブース作りだ。

かつて赤のロゴマークといえばキヤノンであり、赤と黒を基調としたのはライカカメラであったが、新たにパナソニックのリミックスが加わったことになる。

●富士フイルム

富士フイルムはこの時期新製品も豊富だ。デジタルカメラでは、中判の 1 億画素機である GFX100、APS-C 判の X-A7、X-Pro3 等に加え、インスタントフィルムを使用するインスタックスミニプレイは音声記録機能付である。



左：シグマブース。隣はパナソニック、左奥はライカカメラとブースの配置への心配りは細かい。右：一般ユーザー向けの製品紹介でユーザーの質問に答える、右から山木和人社長、大曾根康裕商品企画部長、シグマフランスのプロヴェ氏



シグマコーナーで熱心に「fp」の話を聞くユーザー



ライカカメラ社ブース



タムロンブース



●シグマ

シグマは10月25日に発売したばかりのフルサイズベイヤーセンサー採用の「fp」を持ってフランス市場に参入という感じで、開会初日の7日には自社ブースステージで山木和人社長自らがプレス発表を行い、さらにその後は一般ユーザー向けのfpの質疑応答を含めた製品紹介を行った。シグマとしてサロン・ド・ラ・フォトでこのようなことを行うのは初めてだそうで、fpにかける意気込みを感じる。

●ライカカメラ

2016年、2017年と出展していなかったが、2018年には復帰し、2019年も出展している。いずれも

Lマウントアライアンスグループの主要企業というわけで、外せないのだろうか。会場には、日本では未発表のライカSL2がカウンターに置いてあり試すことができた。



●タムロン

レンズ専門メーカーとしてタムロンはミラーレス機に対して専用レンズを積極的に供給するなど意欲的だ。7月にはソニー用に17～28mm F2.8 Di IIIを出し好調だが、サロン・ド・ラ・フォト直前にはさらに単焦点で近接可能な20mm/24mm/35mm各F2.8 Di IIIを廉価で発売予告している。



cokin はフランスのフィルターメーカーだが、日本のケンコー・トキナーの傘下である。昨年までは、ケンコーのブースにコーキンの製品が並んでいたが、今年はコーキンのブースにトキナー、スリック、HOYA が並んだ



ハッセルブラッド社ブース。CP+2020 では、ドローンの DJI とハッセルブラッドは共同ブースになっているが、サロン・ド・ラ・フォトでは、個別に出展していた



カールツァイスのブース。ドイツのフォトキナ2018 には出展しなかったが、サロン・ド・ラ・フォトには2018 年に引き続き今年も出展している



アイリックス。スイスに本社を置く韓国の交換レンズメーカーだがサロン・ド・ラ・フォトには2016 年以来、独自にブースを出してきている



韓国の交換レンズメーカー“サムヤン”のブースだが、Polaroid オリジナル等と共同ブースなので代理店が出展しているのだろう



日本では積極的に進出している中国の交換レンズメーカーだが、会場では“七工匠 7Artisans”しか見ることはなかった。DIGIX0.COM という代理店のブースだった



中国の三脚メーカー“SIRUI”



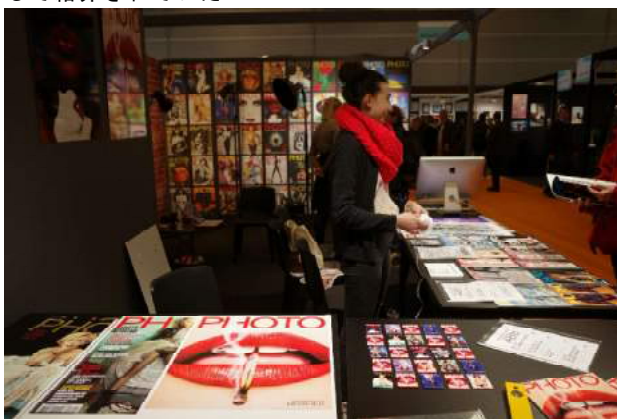
スウェーデンのストロボメーカー“Profoto”のプロ写真家によるモデルを使ったデモンストレーション



FLORICOLOR。ポルトガルの電子ブック会社。さまざまなアルバムが提案され、和綴じはJapanese Collectionとして紹介されていた



cewe。ドイツのオンラインラボで、その工場は日本とは比較にならないほど大規模だ



フランスの写真雑誌“PHOTO”の販売コーナー



POLKA。フランスのパリにある写真ギャラリーであり、写真集なども出版している



会場には写真関連の本を売るコーナーもあり、カメラのノウハウ書、写真集など多くの人が熱心に探している



書籍コーナーにあったマグナムの本。すぐ隣には森山大道の写真集もあった



ドイツのマイク、ヘッドホンなどの音響機器メーカーである“ゼンハイザー”。シネ用マイクとしての出展だ



ガラスの3D写真

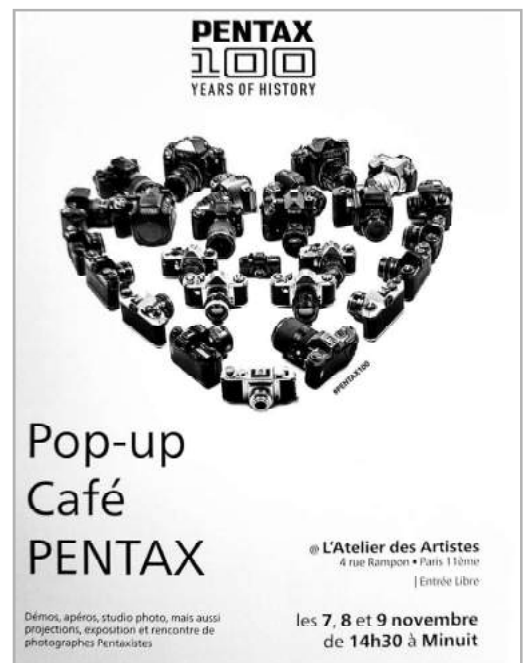


会場を歩いていると目につくのが、富士フィルムの“printlife”と書かれたボードにたくさんのプリントが貼り付けられ展示されている。2018年のフォトキナ会場も同様なプリントで埋められていた。改めて調べてみると、プリントライフは、富士フィルムが2006年から写真はプリントが大切だということで、このような写真展示を世界の主要都市で行っている活動だということがわかる。2018年はバルセロナとケルンを巡回し、2019年はロンドン、パリ、イスタンブールと巡回展示された。この写真を見るために入場した人もいるようで、自分の作品の前で記念撮影したり、自分の作品を撮影したりと、洋の東西を問わず、自分の作品が展示されているのはうれしいのだろう

●世界の中のカメラショー

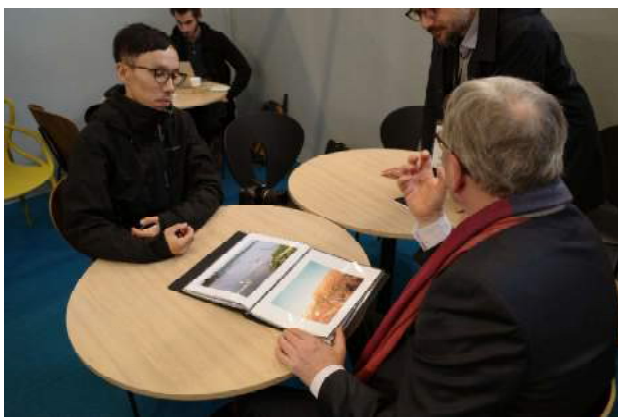
世界的に見たときに写真関係のショーは、ドイツ・フォトキナ、日本のCP+、そしてサロン・ド・ラ・フォトと大きな流れがある。かつて、フォトキナは偶数年の隔年開催であったのが、毎年5月にと決まったばかりだが、その過程で2019年のフォトキナは中止に追い込まれている。

その原因は各ショーの日程が切迫していること、業界全体としてカメラの売り上げが極端に低迷していることなどがあげられているが、今回のサロン・ド・ラ・フォトの展示などを細かく見ていくと、やはりひとところほどの展示の派手さはなくなり、さらに独自に会場内に複数設けられていた作品展示コーナーなどもほとんど見ることはできなくなっている。しかしパリフォトと同時期開催であることなどから、今後も安定した国内向け展示会としての地位は不動だろうが、やはり世界的に業界として低迷していることなどが少なからず影響しているのではないだろうかと思ひ、今後の日本、ドイツでの写真関連の展示会の行方はしっかりと見ていかなくてはならないと考えた。



リコーイメージングは、会期中にペンタックス100周年を記念したイベントをパリ市内で行った

すっかり恒例となったサロン・ド・ラ・フォト事務室にてフランス写真界の重鎮であるアートディレクターのサイモン・エドワードさんに ZOOMS JAPAN 入選作品を見てもらうエディターズ賞「everyone's world」の高木良さん（左）とパブリック賞「Layered NY」のサトウヒトミさん（右）。2人とも真剣だ。





パリフォト会場となるグランパレ正面入り口



天井からの自然光が優しい。STEVENSON ギャラリー（ケープタウン、ヨハネスブルグ）



開放的なスペースだ。Hauser & Wirth。チューリッヒに本部があり、香港、ロンドン、ロサンゼルス支店がある



PRISKA PASQER ギャラリー（ケルン）。多くの日本人写真家と契約を結んでいる

■パリフォト（11.7～10）

PARIS PHOTO (www.parisphoto.com)

日本からこの時期パリを目指す人は、このパリフォト目当てという人が多い。基本的に世界中の写真ギャラリーが集って、作品を展示し販売を行う場として設けられている。

会場はパリ 8 区にあるグランパレで、1900 年のパリ万国博覧会のために建てられたという歴史ある建造物

だ。出展はギャラリーが約 185 ブース、書籍関係が 31 ブース、パネル展示関係が 15 というような構成になっている、日本のギャラリーの出展も多い。

パリのこの時期は、過去にこの場を訪れた経験からすると、今回は珍しく晴天に恵まれた。

ここに紹介するギャラリーは、いずれも正面入り口から入ってすぐのいわば 1 等地に位置している。このうち PRISKA PASQER ギャラリーは日本人作家 Nobuyoshi Araki、Ken Kitano、Leiko Ikemura、Rinko Kawauchi、Hiroko Komatsu、Lieko Shiga、Osamu Shiihara、Yutaka Takanashi、Daido



Gagosian ギャラリー。Man Ray の顔を描き、1900～2000 年の作品を展示。Gagosian ギャラリーは、ニューヨークを始め世界中に 16 のギャラリーをもつ



daniel blau ギャラリー（ミュンヘン）、アンディ・ウォーホルの作品を展示



TAKA ISHII ギャラリー（東京）。1975 年頃の築地仁、1980 年代の中平卓馬の作品を展示していた



AKIO NAGASAWA ギャラリー（東京）。森山大道の作品とベタ焼きの拡大プリントを外壁に展示



The Third Gally AYA(大阪)。山沢栄子の作品を前面に打ち出して展示。2019 年 11 月～2020 年 1 月まで山沢の写真展「私の現代」が東京都写真美術館で開かれていた



YOSHIKI INOUE ギャラリー（大阪）。2017 年に亡くなった田原桂一の作品を打ち出している。田原はフランスに在住していたこともある



Camera Work（ベルリン）。Martin Schoeller の作品



YOSHI MIRO（ニューヨーク）。北アフリカモロッコの作品。2019 年はフランスはアフリカに目を向けた年である

Moriyama、Asako Narahashi、Mika Ninagawa、Tamiko Thiel、Issei Suda、Yutaka Takanashi、Shomei Tomatsu（原文のまま）等が名を連ねている。その逆に歩いていて気づいた日本の主なギャラリーをここに紹介するが、そこに契約している写真家は日本人だけというあたりが、日本のこの分野における立位置であるわけだ。

ここをご覧になってお分かりのように普遍的に世界中で好まれる作品と、国や民族が異なると好まれる作品や評価も大きく異なってくるのだ。その点において日本は作品先進国なのだろうか。



パリフォトでは写真集の販売も行われ人気だ



ルーブル美術館のガラスのピラミッド。この広場の地下にフォトフィーバーの会場となるルーブルカローセルがある



フォトフィーバーの会場。細かく仕切られていて81のギャラリーが出展している



193 Gallery (フランス、パリ)。所属写真家 SAMUEL CUETO の作品を展示



Galerie OLIVIER BARRIOL (フランス、マルセイユ)。写真家自身のブース。サロン・ド・ラ・フォトの項の雑誌 PHOTO の真っ赤な唇の表紙写真は OLIVIER BARRIOL の撮影



Galleria l'Affiche (イタリア、ミラノ)



6x7Gallery (ポーランド、ワルシャワ)、正式に Leica 6x7 Gallery Warszawa というようで、ライカの赤丸ロゴを使い、日本の銀座や京都にあるライカギャラリーと同格だ

■フォトフィーバー (11.8 ~ 10)

fotofever (www.fotofever.com)

パリフォトより後発だが、今年で8回目を迎えることになるが、毎年出展ギャラリーは増えているようだ。規模としては日本からの小さなギャラリーでも出展が可能な費用のようだが、必ず毎年ということではなく、スタート時から見ると消えていくギャラリーも多い。

会場は、ルーブル・カローセ



GALERIE ALBANE (フランス、ナント)。湿板写真での展示もあった



Kichijoji Gallery (東京)。若手の写真家たちがそれぞれお金を分担し合って参加しているという。私が知る限り、少なくともここ3年程は連続して出展している。右端の江平龍宣さんの作品は5枚売れたが、ご本人としてはもう少し売れればということだ。パリでどのような作品が売れるかは興味ある部分なので、小さくても載せてみた



EINSTEIN STUDIO (東京)。「日本の写真家を世界へ」と海外に向けて写真家のプロモーションや出版を行う団体



KG+ (京都)。フォトフィーバーと協力関係にある京都グラフィアの公募作品の展示



ONTAMA PROJECT (東京)。初参加



休憩室にも作品は展示されている。後ろ左の作品は今回唯一見つけた富嶽三十六景の広重的な波と着物姿の女性。この作品で9600ユーロ(約123万円)

ルというループ美術館に隣接した地下商店街の一角にあり、外からではわかりにくい。

会場ではフォトフィーバーならではのということで、毎年START TO COLLECTというテーマで、作品を勧めている。特に昨年は、“japonographie”と称して、日本をテーマにした作品展示が多数ブースで行われたが、今年はそのような作品へのテーマ設定はなくなっている。

日本というに着物・女性といったキーワードのような感じで、フランス人作家の日本をテーマにした作品を数多く見る事ができたが、今年はそのような作品は休憩室に富嶽三十六景的な1点しか見る事ができなかった。このような作風の素早い変化への対応は、どこから来るのだろうか。



会場出口近くの休憩室



セーヌ川に浮かぶ船の上でポリコピーは行われる



デッキでも本が売られていて、ゆっくりと飲み物を飲んだりできる



1 階船室での展示



ZEN FOTO 社のブース



販売人が、ワンボックスカーの後部扉を開けて湿板写真の解説をやっていた



針金のネットにガラス板を吊るし、背景からの光で湿板写真を見ることができる。写っている内容からすると確実に60年以上前のものだと考えられる

■ポリコピー (11.6 ~ 10)

polycopies (www.polycopies.net)

ポリコピーは、セーヌ川に停泊した船上で本の販売を行うフェアだ。もともと、フォトサンジェルマン (PhotoSaintGermain、11月6日～23日) の一環として行われている。2014年から6回目の開催だが、出展社はこちらも入れ替わりはあり、今年は50社の出展があり、この内AKAANKA社、ZEN FOTO社、T&M Projectsの3社が日本からの出展で、T&M Projectsは初出展だ。

船内は、デッキ、1階船室、地階船室と3フロアが使われていて、さまざまな国の写真集を手に

取って見て、購入することができる。例年と異なり青空の中でのオープンなので、デッキに出て飲み物でも買って、ゆっくりとするのもいい。

今年は初めてのことだが、船の前に1台の車が止まり、湿板写真のガラス板を販売していたのが興味深い。湿板写真は、最近日本でも専門の写真館ができるなど、レトロな感じの作風が好まれている。フォトフィーバーの会場でも湿板写真の展示がなされていたが、こちらフランスでも同じなのだろうか。ただしここで売られていた湿板写真は、近年撮影のものではなく過去のもののようで、さすが写真術発祥の国フランスだ。



OFFPRINT。パリ美術学校で開かれる



OFFPRINT。基本的にはこのフロアーが即売会場だ



OFFPRINT 会場にて (I)



OFFPRINT 会場にて (II)

● OFFPRINT (11.7～10) (<http://offprint.org/>)

1600年代に修道院として建てられたという歴史的建造物の中にある国立のパリ美術学校 (beaux-arts de paris) の校舎のなかで行われる写真集の展示即売会がOFFPRINTだ。ここ数年来この場所で開かれているが、訪れた日時、時間帯にもよるだろうが、例年より人の出は少ない感じがした。

日本からの出展もあり、日本人作家の写真集を展示即売している。会場全体を見渡した限りでは、日本からの出展は少なく、目についたのは独立系の出版社スーパーラボ（鎌倉）で、目の前で同じ写真集複数を1人で買っていく人がある。やはり日本人写真家の作品は人気なのだろうか。

● Photo Saint Germain (11.7～23日)

サンジェルマン・デ・プレ地区にあるギャラリーに限られた期間写真をテーマに展示するのだが、ポリコピー、オフプリントもそのイベントのなかに組み込まれている。

ただし、今回は訪れた日が悪いのかギャラリーは開いている所が極端に少なく、かつてのようにフォトサンジェルマン協賛であることを示すステッカーは店頭には貼ってなく、唯一見つけたのが



唯一見つけたフォトサンジェルマンの案内看板

上の写真に示す案内看板だが、例年配られていた印刷されたMapは見つけることができなかった。わずかながら写真を取り巻く状況が変わってきているようだ。



MEP（ヨーロッパ写真美術館）外観



額縁はすべて自作され、木枠にトマトケチャップの缶詰を置いたり、タイヤの縁を使ったりとユニークだ

■ヨーロッパ写真美術館（www.mep-fr.org）

地下鉄 St-Poul 駅から、徒歩数分の所にある写真専門の美術館で、正式には“Maison Europeenne de la Photographie”で、MEP と略して表記される。かつては貴族の館だったそうだが、現在は複数の写真展示会場の他、写真集を始めとした映像ライブラリー、ホールなども備えている。日本でいう東京都写真美術館といったところだろうか。

訪れたときには北アフリカ・モロッコ出身の Hassan Hajjaj の作品を展示していた。Hassan Hajjaj は現在 58 歳で、モロッコの貧しい家庭に育ち、独学で写真を学び、イギリスに渡りモロッコ独自のエキゾチックな文化を極彩色な写真にして、モロッコのアンディ・ウォーホルの心意気で作品づくりしているのだという。モロッコは、かつてはフランス領であったことから、この時期のフランスの写真界ではアフリカ、アラブ世界をテーマにした写真展が他にも開かれていた。

今回訪れた、アラブ文化センターでは、17 人の若い女性の写真作品を展示していた。また Art & Design Fair では 11 月 9 日～10 日まで“Also Known As Africa”の展示をしていたが、この時期のフランスは旧宗主国の文化に目を向けているようだ。



Hassan Hajjaj の人となりと作品について解説する学芸員



人物と有名ブランドのマークのイミテーションの生地やステッカーを貼付け極彩色でエキゾチックな印象を与える



パリのアラブ文化センター。建物の窓にはレンズの絞りと同様に外光の照度によって自動的に絞り込んだり開いたりする予定だったが、いまだ作動したことはないという



“Also Known As Africa”をテーマにした Art & Design Fair の入口。3 日間で 16,000 人が訪れたという



【galerie adiran bondy (mindseye.fr)】日本人写真家・白石ちえさんの「鹿渡り」を開いていた。オーナーは元学校の先生だということだが、日本人の作品には理解があり、今回もZOOMS 受賞者の高木良さんとサトウヒトミさんの作品を見てもらい、記念写真撮影。過去にZOOMSに入賞した山本雅紀さんも2017年にこちらで受賞作品「我が家」の個展を開いている



【LUMIX MEETS / BEYOND 2020 By Japanese Photographers】日本のアマナがパナソニックの協賛を得て行う若手写真家育成プロジェクトの写真展。アムステルダム、東京、パリの写真フェスティバルに連携して開催。今年で開催は7回目



【アンリ・カルティエ・ブレッソン財団 (Fondation Henri Cartier Bresson)】昨年モンパルナス駅近くから、パリ3区に移転してきたばかりだ。過去に何度か訪れているが、不思議とブレッソンの作品を見ることができなかったが、今回はブレッソン自身の作品のうち「中国」を見ることができた。新住所は、79 Rue des Archives, 75003 Paris

■フランスと日本の写真

2019年はダゲレオタイプ写真術が公開されてから180年の記念すべき年だった。そのような中、2013年からほぼ欠かさず11月になるとパリの写真フェスティバルを見てきた。初めて行ったときは日本の写真界との違いに驚き、カメラやレンズなどのハードを作る企業はなくても、写真機材ショーは成立すると考えた。そこには写真機材と写真作品は、それぞれが独立して存在しているかのような印象を受けたが、改めてこの時期見ると、

ハードとしての写真業界の景気が少なからず影響しているのではないかと印象をもった。

そのような中で、今回フランスの関係者の紹介を受けて訪れた吉田公子さんのスタジオは、パリ市内の3階建てのエレベーター付きで、建物そのものはフランスらしく石造りの年代物だが、内装はかなり洗練されていて、各階の手すりにヒーターがついている。しかもこのような建物を、1シリーズの作品展をやることにより手に入れたことができたというし、パリフォトの2日間だけで1年



【KIMIKO YOSHIDA スタジオ訪問】いつもはフランス人のスタジオを訪ねてきたが、今回は日本人・吉田公子さんのスタジオを訪問した。吉田さんは東京に生まれ、日本で大学を出た後に写真の専門学校に学び、1996年にフランス・アルルの国立写真学校行き、以後フランスの奨学金を受けてフランス大学院のルフレノ国立現代アートスタジオに学び、卒業後はフランスで作品制作を行い、さまざまな国で展示を行ってきた。2015年にはGucciがスポンサーとなり京都グラフィーにも出展している。吉田さんの作品はすべて自身のセルフポートレートであり、大判カメラで撮影したのちに処理をするハイブリゼーション写真だ



白で統一された吉田公子さんのスタジオ内部。1フロアの広さはこの3倍はある。中央の男性は旦那様。



【GALERIE AGATHE GAILLARD】毎年訪れているパリで一番古いとされる写真ギャラリー。マレ地区の3区にある



【LA HUNE】サンジェルマン地区にある写真集を売る書店。2階が写真ギャラリーで、フランスのアーティストであり野生動物写真家の“ARNO FLIAS”が組織する団体「I'm Not a Trophy」の野生動物絶滅危機の警鐘を高めるための写真展が行われていた。作風としてはPainted Photographyと称する写真にペンキを塗る技法が独特だ (<https://imnotatrophyp.org/>)



間の作品売り上げがあり、イタリアのベニスには古城の別荘を所有しているというからすごい。日本の写真の専門学校を出て、渡仏してこのような成功を収めている人がいるというのも現実なのだ。

パリで知り合った日本人も複数いるが、いつのまにか参加の写真家、ギャラリーも入れ替わっていた。かつて写真家を志す若い人たちが、アルル、パリへと目指した人たちも多く、その過程で消えて

いった人たちも多数いたことも事実だ。

機材ショーとしての“サロン・ド・ラ・フォト”、さらには作品売買の展示会としての“パリフォト”と日本との関係など、日本とフランスの写真の関係はこれからも時代に応じたバランスを保ちながら関係を深めていくのだろう。

※本報告はカメラ映像機器工業会のCP+ 実行委員会パリツアーに同行させていただいた報告であり、廣瀬行哉委員長、並びに関係各位にこの場で改めて、深く御礼を申し上げる次第です。